

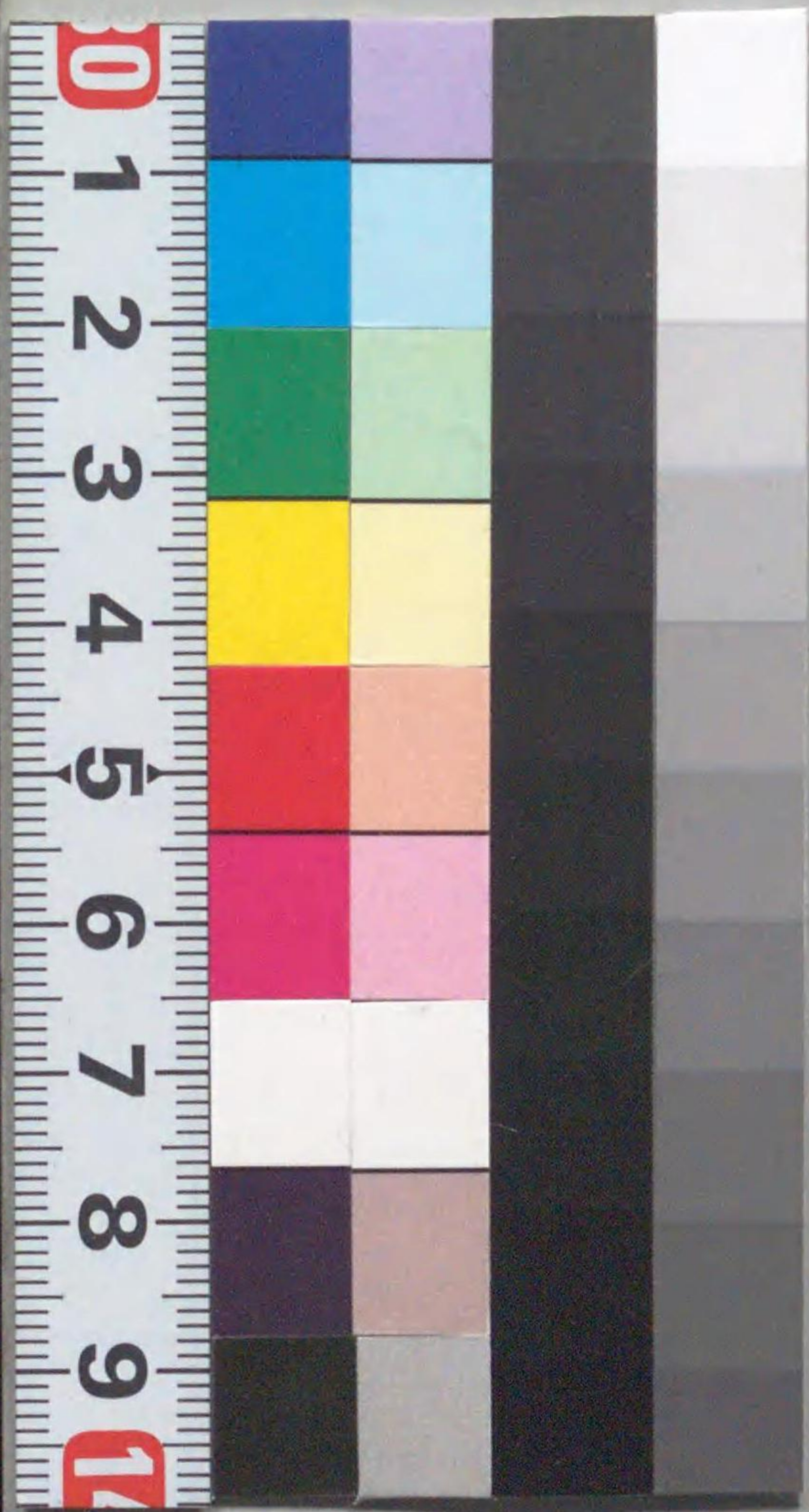


昭和十一年五月

日露戦役の  
実績に鑑みて  
**国際現勢と帝國海軍**

(以印刷代贖寫)

海軍省海軍軍事普及部



目次

第一節 緒言	一
第二節 日露戦役の教訓	三
一、戦争原因と今日の情態	三
二、日露戦役前の我決意及準備	六
三、日本海戦捷の教訓	八
第三節 國際現狀と列國の海軍軍備	一四
一、帝國を繞る列國の動向	一五
二、歐洲方面の現狀	一七

三、	國際不安の原因	一八
四、	列國の海軍軍備	一九
五、	蘇聯邦其の他の軍備	二六
第四節	帝國喫緊の急務	二六
一、	對處すべき帝國の新軍備	二六
二、	國家存立の確保	三〇
三、	海洋發展の急務	三三
四、	海軍軍備充實の要	三六
第五節	結	三六

日露戰役の  
実績に鑑みて  
國際現勢と帝國海軍

第一節 緒言

現時帝国内外の情勢を以て非常時局なりとするに何人も異論はないが既に三十幾星霜前帝國は日露戰役で非常國難に際會し、刻苦奮闘克く之を克服したのであつた。此の大試練を今爰に再吟味し、之を目下の時局に對照して、舉國緊禪、危局の打開に一大勇猛心を奮起する事は日本海海戰記念日に際して最も相應しき考省であらう。

大那翁をしてモスコウの郊戰に空前の慘敗を滿喫せしめ、爾來歐洲に豪然たる霸

を唱へたる大露帝國が、長鞭シベリヤを席卷して決河の如く極東に殺到し、將に滿鮮を侵して帝國の咽喉を扼せんとしたる明治三十七年、叢爾たる帝國が敢然蹶起して之に力抗し、國を賭して上下戮力、遂に大露帝國の野望を粉碎して東洋の平和を確立したる大偉業を、吾人は唯感激の涙を以て回顧するものである。

翻て今日に於ける國際情勢を見るに伊エ戦争、獨國再軍備、ライン非武装地帯への派兵等を繞る歐洲の情勢。歸趨逆圖し難き隣邦支那の環境、蒙支に對する蘇聯邦の活躍等に由來する東亞の諸問題。更に此間に處する列強の對抗的政策、及歴大なる軍備擴張計畫等正に不安危局に満ちて居る狀況である。

斯の如く帝國四圍の狀況は實に容易ならざるものであつて、此際之に對處すべき方策を誤るに於ては重大なる結果を招來するものと斷ぜざるを得ない。之は正に日露戦争前に於て帝國の直面せる情勢と同様であるとも云へやう。

本稿は日本海海戦三十一周年記念日を卜して「國際現勢と帝國海軍の立場」を述べ、國防力強化の急務を説きて我國民愛國の熱誠に訴へんとするものである。

## 第二節 日露戦役の教訓

### 一、戦争原因と今日の狀態

十六世紀以來大露帝國は東洋侵略の政策を執り、清國に向ひ凡有る威嚇恫喝を以てネルチンスク條約、璦琿條約、北京條約等を締結し、着々として西伯利、沿海州を蠶食したのである。

帝政露國  
の東侵

帝國は日清戦役に於て自衛上、清國の暴戾を碎きて大陸方面の國防線を確保し、東洋平和の基礎を樹立せんとしたが、露國は獨佛兩國を誘ひ所謂三國干涉を以て帝國を強壓し我が東洋平和工作の根底を破壊し去つた。然も日清平和條約のインキ尙

乾かざるに早旅順は露國太平洋艦隊の根據地となり、明治三十三年團匪事變に各國軍支那に派遣せらるゝや露國は之を好機となし大軍を滿洲に進め、滿洲鐵道沿線は露兵を以て埋めらるゝの暴狀を呈し、其一部は長驅朝鮮に侵入し來るに至つた。

爰に於て東洋の平和は露國の意の儘に攪亂されんとし、帝國亦生死の岐路に置かるゝに至り遂に我をして蹶起、露軍掃蕩の聖戰を起すの已むなきに立至つたのであつた。

當時帝國が自衛上當然のことゝは云へ、陸軍兵力に於ても海軍兵力に於ても遙かに優勢なる露國に對して敢然と起つに至つた理由は、我國の戰爭能力に就いて確たる自信が出來た爲であることは勿論であるが、尙英米兩國が我に多大の好意を有し有形無形の援助を與へてゐたので、我國は露國以外に他を顧慮するの要なかりし事

をも見逃してはならぬ。

英米の好意

露帝國が歴大なる領土を獲得せしに拘らず殆ど海に恵まれず、爲に不凍港の獲得に手段を選ばざるの觀あつた事は當時世界の脅威とせられ、特に英國は黒海地中海方面、アフガニスタン印度方面及滿洲支那方面に於て露國南侵の銳鋒に直面するの危機にあつた。英國としては地中海方面は幸に土耳其を擁してダーダネルス海峽を扼し、黒海を袋の中に封じたが、他方印度及支那防衛の必要に迫られてゐた。又米國は一八九九年（明治三十二年）國務卿ジョン・ヘイの東洋門戶開放、機會均等宣言以來、支那に於ける第三國の特殊權利の不認に努めてゐたのである。従つて英米兩國は對露關係に於て帝國と相通ずる關係に立ち、帝國に對しては滿幅の好意と聲援を惜まなかつた。日英同盟の如きも斯る事情を背景として成立したものであつた。然るに戰捷後帝國の隆々たる發展を見るに及んで、兩國の好意は忽ちにして嫉妬

英米の態度一變

と變り、爾後帝國に對する其の抑止的工作繰返へさるゝに至つたに對し、躍進日本が之等の壓迫に抗しつゝ、駸々として東洋安定勢力の基礎を固くしつゝあるのが現下の情勢である。

## 二、日露戰役前の我決意及準備

臥薪嘗膽

日清戰後の三國干涉以來、帝國の上下は露國の野望を明に看破し、將來實力を以て之を阻止するに非ざれば到底東洋の平和を維持し國家の安全を完ふする能はざる事を痛感した。茲に於て「臥薪嘗膽」の標語は期せずして國民の聲となり、國を擧げて對露準備の充實を強調し、國民は軍部を後援し所謂軍民一如、官民協力、國富増進、軍備の充實に全能を傾倒した。

明治二十九年には十年計畫を以て、百三隻、十五萬三千噸、經費二億一千三百萬圓の海軍大擴張を斷行して戰艦六隻、裝甲巡洋艦六隻を基幹とする所謂六六艦隊の

舉國一致  
對露準備

新軍備を整備した。更に同三十六年以降十一ヶ年に約一億圓を以て戰艦三隻、裝甲巡洋艦三隻、巡洋艦二隻の建造が協賛されたが、同年末に至り局面の逼迫に鑑み、伊太利にて建造中なりしアルゼンチン國裝甲巡洋艦二隻を急遽購入し、兩艦は日進春日と命名され開戰直前我艦隊に編入された。斯くて我國防兵力は不充分乍らも術を盡すに於ては、東洋派遣中の露國艦隊に痛打を與へ得る程度に完備せらるゝに至つた。

然し乍ら敵は名に負ふ世界一の大陸軍國であり、其の艦隊亦我に倍するの優勢であつたので、當時開戰を覺悟した我國民の決意の如何に悲壯なるものありしかは想像に餘りがある。實に、畏くも上 明治天皇より下各層官民に至る迄、象牙塔中の學者も、「一太郎ヤーイ」の賤ヶ女も、非常國難に愛國の至誠を捧げて戰勝を熱禱したのであつた。

特に我陸海軍將兵の決意に至つては、百年懦夫をして起たしむるの概ありと謂へやう。即ち朝に夕に演習又演習、眞に心頭を滅却して猛訓練に終始し、「勝ちさへすれば死は厭ふ所にあらず」と云ふのが我將兵の念願であつた。斯くて百鍊の我軍は寡を以て必らず衆を破るの信念に達してゐたと謂はれて居る。

三、日本海戦捷の教訓

開戦當時、彼我海軍の勢力は左表の如く露國側が優勢であつた。

	本	露國(黒海艦隊を含まず)
總噸數(噸)	二四六、二三三	三二八、一七四
比率	七五	一〇〇

劈頭の勝因

露國が右の如く優勢なる海軍を有せしに拘らず、度々我艦隊の爲に敗衄し、最後に日本海海戦に於て古今未曾有の覆滅的慘敗を喫したるは、勿論 御稜威の然らし

むる所であり、且聖將東郷提督の籌劃入神なりしと、帝國艦隊の練度、將士の闘志、士氣等が斷然露國艦隊を壓倒したりしに因るものなるは明白であるが、他面に於て露國は其の優勢海軍を歐亞兩方面に二分し、更に太平洋艦隊は旅順、仁川、浦鹽に分散したりし爲、隨所に我艦隊の先制的攻撃を受け、所謂個々撃破を蒙つて敗滅したるに因りし事も争はれぬ事實である。

斯くして東洋の制海權は劈頭より帝國艦隊の手に掌握せられ、全戦局の勝因は爰に明確に作られたものと謂はねばならぬ。

而して日本海海戦の我徹底的全勝は更に吾人に大なる教訓を與ふるものが多い。明治三十七年十月、旅順の堅壘猶攻略に至らず、我滿洲野戦軍は沙河に對峙中にして敵の増援隊は刻々と到着せる情勢にあつた時、全國工業總動員に依りて晝夜兼行完成されたる露國第二太平洋艦隊は、極東遠征の目的を以て波羅的海を出發すと

の報に接した。當時帝國上下の悲壯なる決意は、元軍筑紫に殺到すとの飛報に接した鎌倉武士の夫れにも優るものがあつた。然るに波艦隊來航の途中旅順は遂に陥落し、第一太平洋艦隊は全滅し終つたので、露國は更に第三太平洋艦隊を編成して之に合同せしめ、大舉東洋の制海權を奪回し大陸の戰勢を挽回せんと企圖したが、時既に遅くクロバトキン將軍は奉天に於て慘敗し一路北方に退却中であつた。茲に於て露艦隊の任務は一層重大且困難なるものとなり、此の遠征艦隊乾坤一擲の勝敗は露國として日露戰爭最後の切札となつた。帝國としても亦「此一戰」に依つて皇國の興廢を決するの運命に置かれたのであつた。

明治三十八年五月二十七日、日露戰役最後の血戰は對馬海峽に於て展開されたが、戰鬪は周知の如く世界海戰史上空前の戰果を以て我艦隊の全勝に終つた。

此の大捷が吾人に訓ふる所を左に摘記して見よう。

彼我共に  
此一戰

大捷の原  
因

(一) 當時露國民一般は、戰爭の原因が霸道不純のものであつたが故に、此の戰爭を國家存亡の國民戰爭と考へ得なかつた。のみならず政府主腦部にも戰爭反對論者あり、國內には革命叛亂さへ起つてゐた。従つて遠征艦隊將兵は、唯だ々々日本艦隊との會戰を回避し、身を完ふして無事浦鹽に入る事のみを祈念してゐた。之に反して我國民の上下は眞に國家存亡の血戰たるを自覺し、艦隊乗員亦盡忠報國の意氣に燃へ、身を粉にしても敵艦隊を撃滅し、一隻たりとも浦鹽へは入れぬと云ふ決心であつた。勝敗は戰はずして自ら定まれりと云ふも過言ではあるまい。

(二) 露國が開戰當時極東方面に派遣して居つた海軍兵力は我海軍兵力の約七割五分で、又日本海海戰に参加した露國第二、第三太平洋艦隊は我兵力の約八割であつた。

而して右露國の海軍兵力は兩者とも戰爭の結果全滅したのであつたが、若し開

兵力量と  
進攻の能  
否



戰當時極東方面に在つた露國艦隊が其の全兵力の集中を以て我を攻撃し、その結果帝國海軍が一大損害を蒙つたと假定せば、日本は爾後殘餘の艦隊を以て克く第二、第三太平洋艦隊に對抗し得たであらうか、又第二、第三太平洋艦隊が全部でなくとも其の半分でも、半年早く極東方面に進出して居たとせば、或は又開戰當時既に露國が我より優勢なる艦隊を極東に派遣してあつたとせば、果して日本海軍が斯くの如き赫々たる戰勝を得たか否かは疑問なき能はざる所である。

以上は海軍兵力の迅速なる移動性を有する特質上現實に起り得る問題であつて、架空の假想ではない。

三十年の昔に於て第二、第三太平洋艦隊は遙々一萬五千餘哩を航して極東に來攻したが、現時行動力増大せる優秀なる艦隊を以てすれば、右の如き移動が一層容易になつた事實に鑑みると、進攻の能否は兩國の距離の問題でなく、主として兩國兵力の大小如何に懸るものなることを銘記せねばならぬ。

潜在的勢力

(三) 又優勢海軍國が他國の近海に派遣せる兵力が他國の兵力と略均勢なりとするも、其の本國に控置してある兵力は潜在的勢力として劣勢海軍國に大なる壓迫を加ふるものであることを銘記せねばならぬ。之は波羅的艦隊來るの報道に帝國海陸軍が非常に頭を悩まし、其の到着前極東に在る露國海上兵力を一掃する心要上、肉弾に次ぐに肉弾を以てした壯烈なる旅順の攻圍戰の敢行を要するに至つたことが如實に之を物語つて居る。

(四) 日露戰役に於ては前にも述べた通り我海軍の作戰宜しきを得て、總兵力では露國が優勢であつたが、兵力を集中するといふ兵術上の一大原則を忽諸にしたのに乘じ、帝國は局所に於ては常に優勢を保持したことが大勝利を得た一大原因である。故に日露戰役に於て總兵力の劣勢を以て大勝した過去の事實を以て將來も

兵力量は  
勝敗を決  
する重大  
要素

斯くあるべしとは斷じ得ない、のみならず局所に於て兵力の優勢を保持した爲大勝したといふ事實は以て海戦に於ては、兵力量が勝敗を決する重大要素であることを立證するものである。

海上權の  
重要性

(五) 日本海海戦に於て露國は其の海軍力の全部を喪失し終つたので、東洋の制海權は全く我有に歸し、滿洲軍の戦果も爰に確保せられ、露國は遂に戰意を放棄するの已むなきに至り、我戰爭目的は完全に達せられたのであつた。將來に於ても敵海上兵力を粉碎して海上權を制する事の絶對必要なる理由は、「若し日本海海戦に於て萬一我軍が敗北したとしたら、次には如何なる戰慄的事態が起つたであらうか」を想像すれば、千萬言の説明にも優るであらう。

### 第三節 國際現狀と列國海軍軍備

躍進日本

#### 一、帝國を繞る列國の動向

帝國は日露戦役後相次ぐ幾多内外の難關に逢着したけれども、此間我國民は不屈不撓の奮闘を續けて、克く各方面の困難不況を克服し、躍進又躍進今日に至つたのである。

此躍進は、帝國が國家の自立生存上の必要に迫られて、あらゆる努力精進を續けた結果であるのに、自國の繁榮維持を以て世界平和の基調なりとする列強等は、帝國の躍進を以て平和均衡の破壊なるかの如く見做し、關稅障壁其他を以て極力之が妨害に努めた、同時に滿洲國獨立及北支自治運動等に對する帝國の行動を以て、支那侵略の端緒なりと誣ひ、却つて之を好機として自ら航空、鐵道、借款等の利權占得に狂奔し、或は各種の外交的術策を弄して、帝國を孤立の立場に置かんとするものさへある様である。

列國の東  
洋政策

米國は「ジョン・ヘイ」の宣言以來、支那門戶開放政策を堅持して居り、將來も其態度を變へないであらうし、英國も亦東洋權益の維持、擁護の爲には極力努力することゝ思はれる。過般の軍縮會議に於て英米兩國が、飽迄帝國の公正なる主張を遂拒し優越海軍の保有を固持したのも右政策推進の準備工作に他ならぬ。

蘇聯は滿洲事變以來、銳意極東軍備の充實に努めつゝあつたが、過般來歐洲方面に於て佛蘇相互援助條約の締結に成功し、英國とも親善關係を結ぶに至つた餘威に乘じ、近來は寧ろ極東に於ても積極的態度を示して居る。打續く蘇滿國境紛争、蘇蒙密約の發表等は其の現れとも見るべく、支那共產軍の行動にも相通するものがある様に推せられるのである。

昨年十二月紐育タイムズ紙は支那問題を論じ、「日本は河北、察哈爾を足場として支那本土に其の勢力の基礎を築いた。日本の此支那に對する勢力の擴大は、聽て東

洋の平和を破壊するものであるから、之を阻止するには英米蘇の勢力を以て均衡を圖る外はない」と説き特に英米の協力を強調して居る。而して米國上院外交委員長ピットマン氏、及英國南阿のスマッツ將軍等は、最近激越なる語句を以て、「日本を制壓する爲に英米協力」の必要を力説してゐる。英米提携も彼等の言辭の如く容易に行はるゝものとは考へ得ざるところなるも、此種の言論あるに鑑み注意を要するものと思ふ。

## 二、歐洲方面の現状

資源獲得と人口調節とに焦慮せる伊太利は、昨年以來聯盟の經濟制裁、英國の強壓、佛國の調停等を見捨て、殖民地擴張の爲對エチオピア軍事行動を進め、歐洲の天地を暗澹たらしめたが、次でナチス獨逸は昨年三月再軍備の爆彈宣言を放つて歐洲諸國就中佛蘇を震駭せしめた。爰に於て佛蘇兩國は、相互扶助條約てふ一種の

歐洲の不  
安

攻守同盟を結び自國の安全を圖つたのであるが、獨逸は此の佛蘇の協定を以てロカルノ平和保障條約の精神を蹂躪せるものと看做して、「條約上の非武装地帯たるライオンランドに突然大軍を進駐せしめ、完全なる主權下に於て兵備は當然なり」と宣言し、再び全歐に大爆彈を投じた。而して伊太利、埃太利、波蘭等の不遇國は獨逸に對して靈犀相通ずるかに見へ、之に對して佛、蘇、英、白等の現状維持主義諸國は、獨逸の行動を以て國際信義無視なりと憤激し喧々轟々たる狀況である。

### 三、國際不安の原因

國際不安  
の原因

前述の如き極東、歐洲方面等の不安なる状態は、果して如何なる點に因由するであらうか。

其れは一方に於て有り餘る資源を擁して威福を擅にする國あるに對し、他方國土狭少資源貧弱、加ふるに人口過剰にして國家としての存立上多大の困苦を嘗めることを餘儀なくせられる國があり、而も之等に世界平和の美名の下に、現状維持の鐵鎖が嚴として張り廻らされて居ることが現下國際關係を險惡ならしむる根本原因と考へられるのである。

昨年來英米諸國に於て「ハウス」大佐其の他知名の士によつて、資源再分配が論ぜられたのであるが、英米等の識者が此の點に目醒むるに至つたことは當然でもあり又世界平和のためにも喜ぶべきことである。

### 四、列國の海軍軍備

列國海軍  
力の消長

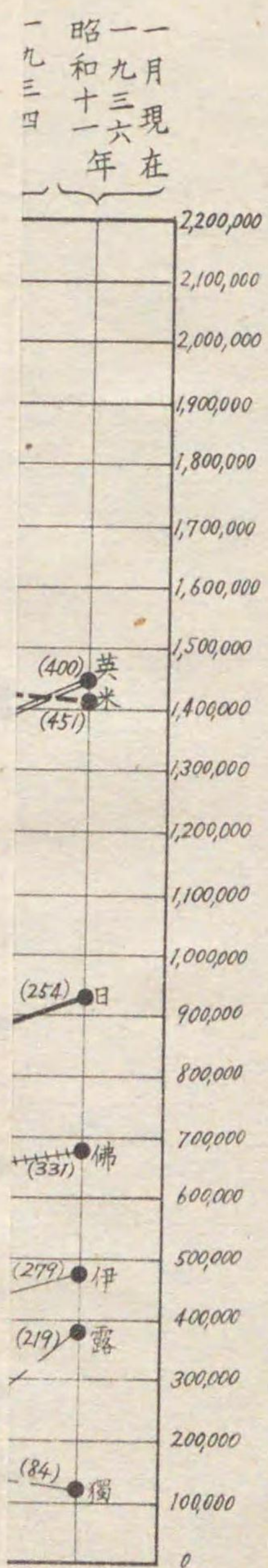
以上記述せるが如き現下の國際情勢に於て、國防力強化の要切なるは云ふ迄もないが、國防力の第一線たる軍備に就て列強の過去及び現在を先づ再吟味する事とする。

主要海軍國海軍勢力消長の狀況は第一表の通である。本表に依り特に注意を喚起し

列國海軍  
力の現状

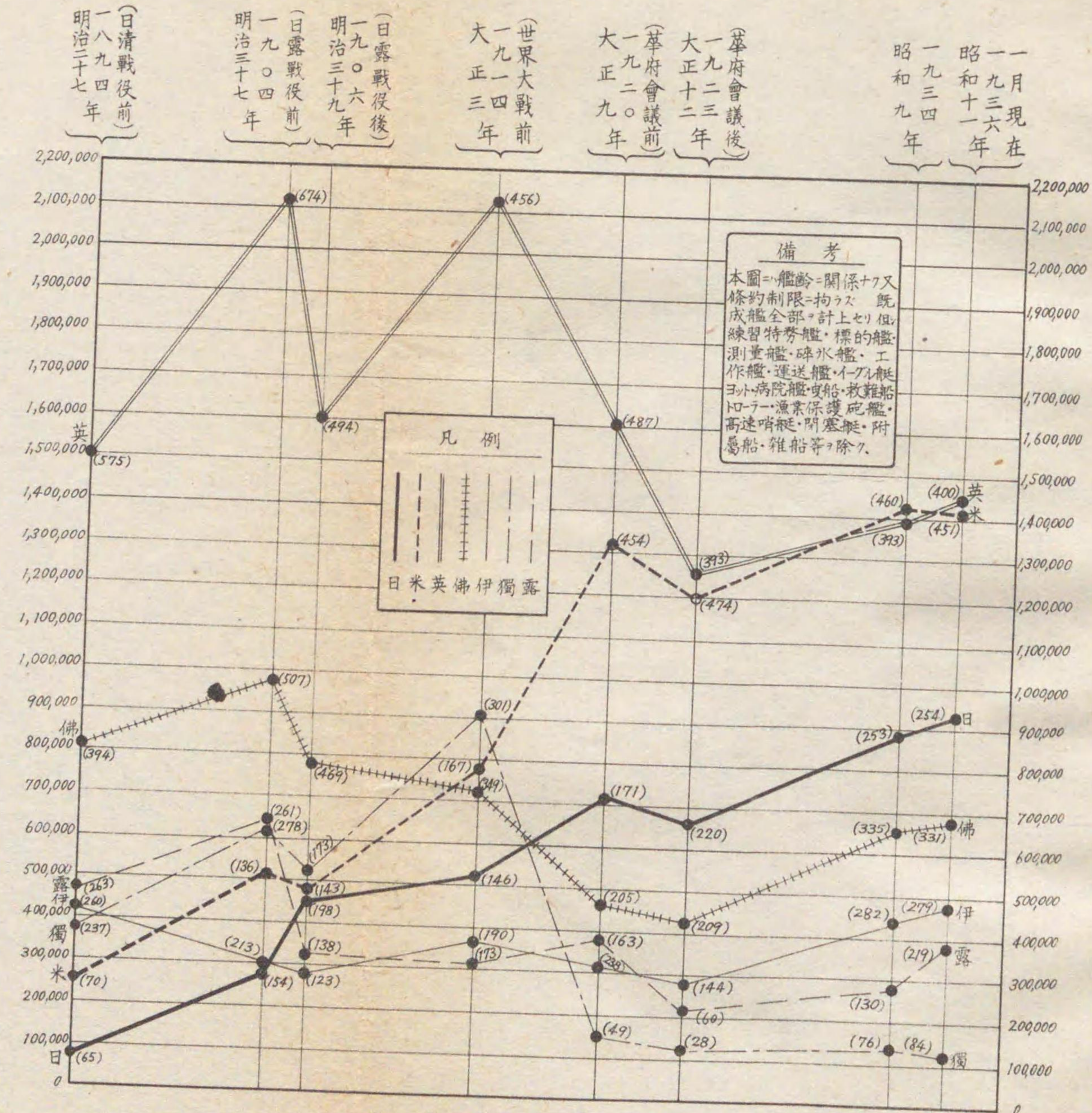
たきは、帝國海軍躍進の姿と、日露戦役當時に於て日米海軍勢力が殆ど同等であつたことである。

次に本年二月末の主要海軍國海軍力を比較すれば第二表の通である。



第一表

主要海軍國海軍勢力(既成艦)消長一覽圖



たことである。  
次に本年二月末の主要海軍國海軍力を比較すれば第二表の通である。

航空母					主力艦					種別	區	
伊	佛	英	米	日	獨	伊	佛	英	米			日
—	—	六	三	四	三	四	九	一五	一五	九	隻數	艦齡內既成艦
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	噸數	噸數
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	隻數	艦齡超過既成艦
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	噸數	噸數
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	隻數	既成艦計
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	噸數	噸數
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	隻數	建造中
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	噸數	噸數
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	隻數	未起工
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	噸數	噸數

第二表

六大國海軍勢力比較表

昭和十一年二月二十九日調





米國の軍備強化

而して米國は一九三七年より主力艦の代換に着手し、第一着手の二隻は三萬五千噸級にて目下設計中であり、尙補助艦船二十二萬噸の建造案が提出された模様である。従て若し帝國が第三次計畫を實行するに非れば、昭和十四年前後より米國の對日海軍力は絶對優勢地位に達するものと見なければならぬ。

その他、米國は艦隊用艦載飛行機二千機整備五年計畫（昨年末現在約千機）の實施、局地防禦用戦闘機三千機整備五年計畫、現存主力艦の大改装、海軍人員二萬三千名の増員、太平洋沿岸防備強化、就中グワム島の防備再興論が擡頭し、布哇比島間の航空連絡等主として太平洋方面を對象として着々壓倒的軍備の充實を強調しつつあることは、特に注意を要すべきであらう。

英國最近の建艦

英國は大戦後一時建艦緩漫となつたが、一九二四年（大正十三年）頃以來堅實なる補助艦充實計畫を立て、昭和六年以來左の如き建艦を實施し來つた。

航空母艦	一隻	二二、〇〇〇噸
乙級巡洋艦	一九隻	一四一、六四〇噸
驅逐艦	五四隻	七三、九三五噸
潜水艦	二〇隻	二二、二一五噸
合計	九四隻	二五九、七九〇噸

英國の擴充計畫

然るに英國は、主力艦に老齡艦比較的多く其の代換を考慮せねばならぬ外、更に補助艦の充實、空軍の擴張等を行はんとし、本年三月政府は白書を以て國防計畫を發表し、主力艦の代換建造は一九三七年より始め現存主力艦の改装は依然之を繼續すると共に、巡洋艦は七十隻に之を増加し、空軍の大擴張を行ひ超重爆機を含む大整備を行ふべきことを明にして居る。差詰明年一月より、主力艦二隻、巡洋艦五隻、空母一隻、驅逐艦十二隻、潜水艦若干、合計十七萬五千噸を三千五百萬磅を以て起工するものゝ様である。その他新嘉坡軍港の施設、香港及濠洲防備等の強化、濠

洲、新嘉坡、香港の航空連絡等に巨費を投じ、之が急速なる實現を期して居る様である。

本年三月チャーチル元海相が、「新嘉坡軍港が防備の見地より計畫されあるは甚だ遺憾である。宜しく攻撃的前進根據地として建設すべきである。」と海軍當局に進言したとの報があるが、能く這般の消息を語るものと謂へやう。

### 五、蘇聯邦其の他の軍備

着々進む  
露國の軍備

最近蘇聯邦が日本全陸軍に匹敵する強大なる新式兵團を極東方面に集結し、各所に大軍需工場を建設する外、交通運輸機關の大規模の整備を行ひつゝある事は周知の通りであるが、特に浦鹽には數十隻の新式潜水艦及び數隻の驅逐艦を配備せられて居ると傳へられてゐる。之れ我海軍として大なる關心を有する點である。之等海上兵力は往年日露戦役に於て東洋の制海權を日本に掌握せられ、我滿洲軍が何等後

方の顧慮なく自由なる活躍を演じたる苦き經驗に鑑み、有事の場合我大陸作戦軍の後方連絡を遮斷せんとする可能性大なることは言ふ迄もないだらう。若し戦時に日本海、黄海乃至は太平洋に於て之等潜水艦が變幻出没すとせば、之に對する充分なる備へあるに非ずんば、世界大戰に於て獨逸潜水艦に完膚なく惱まされたる英國の窮狀以上の光景が、帝國に於ても現はれぬとも限らない。

支那の空軍

支那が最近歐米各國の指導に依りて、航空の大擴張を圖りつゝある事も隠れなき事實である。各地飛行場の建設、飛行學校及其の教育、飛行機の供給、飛行機製作所の設立等は主として歐米諸國の資本技術等に依りて行はれつゝある。之等の空軍が有事の場合帝國の危機に際して、他國の教唆若は強要に依り、何時第三國に利用せらるゝか豫斷すべからざるものがある。

#### 第四節 帝國喫緊の急務

脱退後の  
軍縮會議

##### 一、對處すべき帝國の新軍備

五國軍縮會議は本年一月帝國の會議脱退に依り四國會議となつたが、更に伊太利の脱退に依りて英、米、佛の三國會議になり終つた。

三月、三國軍縮會議は建艦通報案、質的制限案を主とする軍縮條約を兎も角も成立せしめて閉會した。右條約は何等帝國の軍備計畫を拘束するものではないが、其の内容を検討するに、量的制限を伴はず、又重大なる保障條項が存在する等實質的に軍備縮小の目的を達し得るものとは考へられない。

我新軍備  
の要

一方列國は前項記述の如く着々軍備を充實擴張しつつある。如斯雰圍氣中にあつて帝國獨り現状の軍備に甘んずるに於ては、近く三、四年後には如實に劣勢比率に

轉落し國防上危險に直面する。帝國が軍縮會議を脱退せる理由も劣勢比率兵力を強制せらるゝ事を以て我國防の不安であると痛感せしに依るものであるが故に、現事態に對應すべき自衛上必要の最少限度の新軍備を設立する事は、帝國當然の處置である事は云ふ迄もない。勿論新軍備たるや自衛の範圍を出づる事なく何等他國の國防に脅威を與へる如きものではない。従て帝國の新軍備建設を以て建艦競争を開始するものと解釋する如きは、全く真相を誣ふるものであつて、帝國は飽迄年來の主張たる不脅威不侵略の原則を尊重するものである。而して我新軍備は全く自主的に獨自の特徴を發揮するものたるや云ふ迄もなく、我地理的情勢に即し、我國民性に最も適合し、且最も效果的にして經濟的なる内容を以て建設されるであらう。

不脅威  
不侵略

爰に不脅威不侵略の軍備と云ふは、他國の國防を脅すものではないが來攻する敵

艦隊に對しては、之を撃滅するに足る實力を備へ以て我に對する脅威を除去し得るものたるべきや勿論である。

## 二、國家存立の確保

國防力

現下内外の情勢に際し國防の安固を確保せんが爲には、軍備の充實を不可缺的緊要事とし之に關しては右に述べた通りである。

然し乍ら此の重大危局に對處すべき緊要事は獨り軍備其のものゝ充實に留らず、舉國一致之が背景たる國家の諸點を強化し、他國をして乘ずる機會を無からしむるに在る。即ち軍備充實の外、國家の産業、經濟、財政、外交等各部門の實力完備、及國民思想、智力、技術等人的要素の練成向上に依り、總體としての國防力を強化せしむるにある。

軍備の強化

軍備の強化に就ても、單に兵力量の充實に留まらず、軍人精神の練磨、統制の確

立、術力の向上、艦船兵器の改良進歩等之に伴はざれば、有事の際國家の防壁たる能はざるも保し難い。之れ軍隊の上下を擧げて夙夜自ら鞭撻國軍の本務に精進しつゝある所以である。

國民思想

國民思想の健否が國家活動を左右する事は極めて大である。帝國に於ても共產主義の潛入、西洋個人主義自由思想の浸潤等に依りて、一時憂ふべき状態にあつたが、近來漸次本然の日本精神に還元しつゝあるは洵に慶賀すべきである。然れども今後益教學風教の刷新を行ひ、健全なる國民思想の基礎を確立不拔ならしむるの要は識者の齊しく認むる所である。

其の他

産業經濟力の伸張は國家の富強を基礎づけると共に、國民生活の安定を齎らすものである。従つて國家が特に内外資源の開発及獲得、陸運、海運、航空、通信等の振興及商工業の促進、農業水産業の保護奨勵等に最善の努力を拂ふべきは當然であ

る。其の對外的保護推進の爲に外交と軍備とがあり外交と軍備とは又背後の産業經濟力に依て培養せられ強化せられて、益本來の機能を發揮し得るものと謂へる。

外交は平時の戰略とも見るべく、國家存立の確保上重要な影響を有するのである。而して外交をして眞に權威あらしむるものは、背後の力と正義を基礎としたる對外國策とであると云へよう。國際外交は相互に和平を主とし協調を旨とする事が望ましいのであるが、今日の如き國際情勢に於ては、確乎不動の自主的積極外交を以て根幹となし、東洋安定勢力としての指導的立場を貫徹する事こそ、眞の平和打開の途であると謂へやう。

惟ふに、帝國今日の危局を克服するには、以上の如き國防諸要素が、確乎たる國策の下に一貫せる指導方針を以て、渾然一體として強化せらるゝ事に依りて、其の目的を達し得るものと謂はざるを得ない。

### 三、海洋發展の急務

國家存立の確保上重視すべき諸項は前述の通であるが、更に閑却すべからざる重大要素として海洋發展を挙げねばならぬ。

帝國は國土狹小天然資源豊ならず、爲に國民生活、國家發展竝に國防軍備に必要な諸原料の多くは海外よりの輸入に俟たねばならぬ。然るに之等必需品は悉く海洋隣接區域に産出せざるはない。従て海洋の安全を維持し以て原料の輸入及製品の交易を自由確實ならしむる事は、國民生活を安定ならしめ、産業發展の基礎を確立し、且軍需材料の充足に不安なからしむるものである。

#### 工業立國

而して海洋の利用に依つて前記諸原料を安價に入手し、以て國內工業を殷盛ならしめ、其の製品は我船舶に依りて多量海外に輸出せられ、而も豊富にして勤勉なる我勞力、優秀なる技術及合理化されたる工場機構、潤澤低廉なる水電動力等と相俟

必需原料  
の自足

ちて爰に初めて工業立國を完成する。現在我輸出製品が良品安價の大旆の下に世界的躍進を続け來れるは周知の通りである。

海運業の躍進

我國の輸出工業が原料輸入、海運業及金融機關と離るべからざる關係にあるは云ふ迄もないが、特に優秀なる我海運業の協力に依りて其の發展が拍車を掛けられ、今や我商品は亞細亞南洋方面は勿論、歐洲の牙城及南北米、阿弗利加方面にも盛なる進出を見せ殆ど全世界を席卷しつゝある。帝國が新世界の舞臺たる太平洋の最要點に占位せる事は、優秀なる船員及進歩せる造船術と相俟ち、我海運界の將來に無限の繁榮を約束し且益々國內工業の發展を推進するであらう。

水産進出

而して又水産業方面に於ても先天的勇敢なる日本漁師群は、今や北はベーリング海峽、東は北、中、南米沿岸、西は沿海州、南北支那海、印度洋、南は濠洲、南氷洋、更に又大西洋方面に至る迄、叢爾たる發動機船を以て縦横無盡の活躍を恣にして居る。彼の今尙廣大無邊の寶庫として残されたる南洋全域の豊漁場が、日本漁船によりて開拓せられ、我國内の食料問題に大なる寄與をなし同時に海外輸出に依りて國富の増進を激成する事は極めて近き將來であらう。

海外發展

而して以上の必需原料の入手、商品販路の擴張、海運業の發展、移植民の進出等を完行する爲には、海外投資と企業とが之に平行する事最緊要であらう。一言に海外發展と云ふも、要するに人的要素と財的要素とが相協力進出し、同時に之が内地の産業と密接不可分に相關聯するに於て最效果的である。將來前述の處女地に我勞力及資本の併進を見る事は我國各部門の發展を激成すると共に、該地方自體の繁榮に裨益し、所謂共存共榮の實を擧げ得るものと謂へる。

之を要するに、海洋發展は物質上將又精神上、躍進日本の眞の國力強化に對する偉大なる與力であり、帝國として益々之が伸長助成にあらゆる努力を拂ふべきの要

を痛感するものである。

#### 四、海軍軍備充實の要

軍備充實の要  
以上記述の國際情勢及列國軍備の擴充情況等に鑑み、此の際帝國が國防の安全を確立し、我諸權益を擁護し、且我國の躍進發展を推進する爲に、軍備の充實を急務とする。

生産作業  
を行ふ海  
軍費

爰に注意を喚起し度きは、海軍費は殆國內に於ける産業的消費である點である。帝國海軍に現在に於て全く國產海軍であるが故に、海軍費の九割四分は國內に消化せられ、之が爲近來國內の軍需工業は大に勃興し、經濟界に於ける資本の流通を促して景氣の恢復を助長した。従つて失業者の減少、各方面購買力の増加となり、農山村の復興にも寄與したことは争はれぬ事實である。同時に海軍としては中小商工業及農山村利潤増加の目的を以て、地方物資の購入、地方子弟の工廠雇傭、軍需器材部分品の中小工業化及家庭工業化等を実施し來つたが、今後は一層之を擴大し地方更生に大に資する所あらんとして居る。従つて海軍費を以て不生

帝國海軍  
の使命

産的なりと考へ單に不還的資本の放下となす如きは大なる認識不足と謂ふべきである。

更に我海軍本來の使命を考ふるに、有事に際し國家を泰山の安きに置くにあるは勿論なるも、其の儼然たる存在は又我帝國の權威を重からしめ他國の壓迫輕侮を排除し、東亞の安定勢力たる帝國の使命を完ふすると共に、其の保護推進に依て我海外發展等を助長するものであつて、延ひて國家の産業經濟を鞏固なる軌道上に運営せしむるものである。

又國防軍備の完備は其の儼存に依りて他國の野望を挫折せしめ、戰爭の慘禍を未然に防止するに至るものである。彼の上海事變當時、日米兩國關係の緊張に際して太平洋の戰禍を免れしめたるは、帝國海軍の沈黙裡の威力に負ふ點が多かつたとは識者の認むる所である。

目下帝國海軍が銳意其の内容の充實を圖り、所謂不敗の軍備たらしめんと劃策し

つゝあるのも、毫も戦争を求むるが如き意圖を有するものにあらずして、其の實力の儼存に依つて他國の戰意を抛棄せしめ、人類の大慘禍たる戦争を防遏せんが爲に外ならぬ。我海軍の使命が東洋平和の確立に在りと稱する所以も實に茲に在る。

### 第五節 結 言

日露戦役の戦訓に鑑み世界の情勢及我國內の實狀を想ふ時、我國民は今や異常なる覺悟を要すべき時である事を痛感せざるを得ない。爲政者も、國民も、軍人も、最早何等の躊躇逡巡を許さず、小異小我を捨て打つて一丸となりて、此の大轉換期に處せなければならぬものと思ふ。

即ち、各部門の總動員と大英斷とを以て、國力の充實強化を圖り、就中、焦眉の急たる軍備の完璧を期せねばならぬ。

之れこそ非常危局を克服し、以て空前の國家大試練を脱過する途であらう。

斯くてこそ國家の大繁榮も期して待つべきであるのみならず、實力の完備は自ら平和の脅威を排除し、我對外關係を調整し得て、爰に萬邦協和、世界恒久の平和を顯出し、我建國の理想を實現し得るに至るものと信ずる。

日露戦役當時に於ける我國民の偉大なる業績を回顧し、帝國の現狀を想ひ、昭和  
日本國民の一大勇猛心を熱望して已まざる次第である。(昭和十一年四月十日稿)

(終)





